

防衛会議は紛糾していた。

原因はイスカandalからもたらされたメッセージであった。

16万8千光年離れた大マゼラン星雲まで行けば、地球の環境を復元するコスモリバースを渡すという。結構な話だ。ガミラスの遊星爆弾に地球全土を破壊された地球はそのままでは生きられないのだ。

そのために、使者のユリーシャが到来し、波動エンジンの設計図ももたらされた。

それも良いことだ。

地球の技術で16万8千光年の旅は無理だからだ。

全面的にそれに乗るのがヤマト計画派だった。

しかし、反対は根強かった。

なぜなら、本当にその旅は可能なのか。可能として、本当にコスモリバースは存在するのか。それを渡してくれるのか。疑問は多い。そもそも、使者のユリーシャが乗ってきた宇宙船に、なぜコスモリバースを積んでこなかったのか。疑惑は疑惑を呼んでいた。更に悪いことに、使者のユリーシャは事故で意識不明だ。説明も受けられない。

反対派であるイズモ計画派の主張は単純明瞭。波動エンジンの技術を使って第2の地球を探して移住すべきだというのだ。ヤマト計画派のプランが不明確な要素だらけなのに対して、イズモ計画派の計画にはギャンブルの要素が皆無と言えた。

イズモ計画派の問題は1つしかなかった。

それは、住み慣れた地球を捨てて良いのかという情緒的な問題だった。

しかし、既に壊滅的に破壊されている以上、重要な障害ではなかった。

その状況で沖田十三はあえて発言した。

「防衛会議の皆さんに質問したい。イスカandalは地球を信用して波動

エンジンの設計図を渡してくれたのに、その信用を無にするおつもりか。地球は大宇宙の良識を代表する善良な惑星ではなかったのか」

「やめたまえ、沖田君。君はオブザーバーだ。防衛会議を批判する権利はない」

一喝されて沖田は黙った。

隣に座っていた土方も肩をすくめた。

現場の指揮官である沖田や土方は、参考のために呼ばれただけで防衛会議の正規メンバーではないのだ。

会議場を出た沖田は地球防衛軍地下司令部に向かった。

防衛会議が開催中なので、大物はほとんど出払っていた。

「ヤマトの進捗状況は」沖田は質問した。

「あとはもう波動コアをセットしてエンジンを始動するだけです」真田が答えた。

「ならば一人でもできるな」

「沖田艦長」真田は立ち上がった。

他の者達も立ち上がった。

「イスカandalに行くのですね？ ならば我々もご一緒します」

「しかし、防衛会議の決定に逆らうことになるぞ」

「構いません」古代が言った。「汚いイズモ計画派の言いなりなりたくはありません」

「分かった。だが抜きたい者は途中で抜けてくれ。わしはヤマトで待っている。以上だ」

地球防衛軍司令部は騒然となっていた。

「ヤマト計画派が続々とヤマトに集まっています。見てください」

老人優先じゃい、と言いながら佐渡酒蔵が乗りこむところだった。

「すぐにやめさせます」芹沢参謀はマイクを取った。

「直ちに退艦せよ！ 君たちの行為は地球防衛軍への反逆行為である」

沖田はスイッチを入れて芹沢の言葉を艦内に流した。

「みんな聞いた通りだ。これが我々の旅立ちだ」

「乗組員全員、退艦者ありません」

「よし、徳川くん。波動エンジン始動」

「しかし、エネルギーが……」

「それなら大丈夫だ」と真田は言った「太平洋ケーブル経由で、ヤマト計画に賛成する各国から寄付が集まっている」

「しかし、寄付と言っても」

「今頃北米全土の地下都市が停電で真っ暗かもしれないな」

「日本の地下都市は明るいのに皮肉だな」

一同は笑った。

ガミラスのミサイルを撃破してヤマトは発進した。

だが敵はガミラスだけではなかった。

先回りした『きりしま』が行く手を遮り、宇宙からヤマトに主砲を向けたのだ。

「あれほど手早く対処できるのはあの男しかいない」沖田は言った。

「あの男？ 誰ですか？」古代は振り返った。

パネルにその男の顔が写った。

「土方……」

「沖田。今からでも遅くはない。オレと代われ。いやだと言うならここでヤマトを撃沈する。それが防衛会議の決定だ」

「古代、主砲を『きりしま』に向けろ」と沖田は命じた。「しかし、命令するまではけして撃つな」

両者は、主砲を向け合いながら接近した。

そしてついに距離が0になり、至近距離をヤマトは通過した。

『きりしま』のブリッジで土方は言った。

「あれはヤマトではないような気がする」

「は？」

「ヤマトはもっと違った形をしていたと思う」

それから土方は命じた。

「司令部に連絡しろ。接触予定座標にてヤマトと接触できず」

「それだけですか？」

「あの艦にメッセージを送れ。貴艦の航海の無事を祈ると」

ヤマトのブリッジではそれを相原が受信していた。

「返信はどうしますか？」

「馬鹿めと言ってやれ」

おわり